

教育的価値	具 体 の 項 目	教育課程
2【かかわる】	⑭【復旧・復興へのあゆみ】 震災津波で被害を受けた交通網や産業、住宅やまちの復旧・復興の状況を調べ、生き生きした町づくりにかかわる。	総合的な学習

【題材】 被災地訪問学習

～宮古・赤前小との交流を通して～（かかわる）

【対象】 訪問校 宮古市立赤前小学校 訪問者 矢巾町立煙山小学校 第5学年児童95名

【ねらい】

実際に被災された方から話を聞いたり、被災地の様子と復興の状況を感じたりして、「岩手のこれからについて」自分の考えを広げ、郷土を愛し未来を切り拓く人材としての資質を育む。

【実践の概要】

【第1次】事前学習（1時間）前宮古小校長による講話

平成26年10月9日(月)、本校に勤めている前宮古小学校校長の相模貞一先生に講師になっていただき、5年生全員を対象に講話をいただいた。「勤めていた宮古小学校は津波による被災は免れたものの、長い期間避難所となった。これからどうすべきか、前を向いて教科の勉強を防災教育の視点から見直した。体育はいざという時に逃げ切れる機敏さや体力を養う。勉強の意味が分かると色々なことが見えてくる。震災後、たくさんの人たちの支援を受けた。そのお返しに鹿踊りやブラスバンドの演奏などに積極的に取り組んだ。復興には街や堤防などのハード面だけでなく、心の復興が必要である。私たちは岩手県全体を挙げて復興を目指さなければならない。これから一緒に何ができるか、宮古の山根さんの話を聞いて考えてほしい。」などと話をいただいた。子ども達は、「宮古の街は今、栄えているのですか。」などと活発に質問していた。

<事前学習のようす>



<宮古での学習のようす>

【第2次】被災地訪問

○ 5年生95名が10月28日(火)、宮古市赤前地区を訪れ次のような学習を行った。

① 講話

宮古市立赤前小学校の体育館をお借りして、「宮古湾の藻場・干潟を考える会」の山根幸伸会長から漁業の復旧状況について講話を聞いた。「牡蠣の養殖は、生産量は元に戻りつつあるが、以前の取引先が他の産地から仕入れるようになり思うように売れない。したがって『宮古産』として、他と差をつけなければならない。そこで桜の時期まで育てて実入りのいい『花見牡蠣』として売っている。復興は元の通りになっても復興にはならない。前よりも前進した時が復興の第一歩だ。」などのお話があった。その後、海の方に移動し牡蠣の養殖施設を見せられた。



② 交流

仮設住宅が立つ赤前小学校の校庭の一角を使わせていただき、赤前小児童 27 名と仮設住宅の住民約 20 名の前で、本校で取り組んでいる「煙小さんさ」を披露した。その後、自分たちで田植え、稲刈りをして収穫したもち米を一人ひとりにプレゼントした。本校児童と赤前小の児童が交流する場面では、笛を吹いて聞かせるなどして、すぐに自然な交流が始まった。



<交流のようす>



【第3次】学んだ事を発信 壁新聞作り（6時間）

帰校後、被災地訪問等で学んだことを、壁新聞にしてまとめ、発信した。生活班（5～6名）で模造紙大1枚に記事を分担して制作した。児童達は意欲的に取り組み、放課後に自主的に残って作った班もあった。完成した壁新聞は保護者参観日（11/18）に向けて、教室や廊下、階段に掲示された。



児童の感想から

私たちが訪ねた赤前地区は、草が一面生えていてガレキも残っていました。車の高さの三倍もある堤防を乗り越えて、こんなにすごい津波が来たんだ、と恐ろしくなりました。お昼を食べて赤前小学校に行き、さんさを踊ってお米を配ったらみんなが笑顔になってとてもうれしかったです。赤前小では、休み時間に全校で鬼ごっこをして楽しく過ごしていて、ほっとしました。これからも募金など、自分にできることをやって復興に関わっていきたいと思います。

まとめ

本校は教育振興運動が盛んな地域であり、児童達は、祭りや郷土芸能に地域の方々と関わりながら体験し、地域のよさに気付き郷土を愛する心を育てている。また、本校では教育課程を復興教育の視点で見直すとともに、5年生において系統的な復興教育のまとめとして被災地に行き、より直接的に学ぶ体験活動の取組を行っている。今まで知らずに過ごしてきた被災地の現状や人々の思いに気付き、将来へ向けてそれぞれが考えるようになったことが大きな成果である。

課題は、復興教育の視点で見直した教科等の意義の理解をさらに深めて児童に教えることと、昨年8月9日に本町で発生した豪雨による災害の経験を踏まえ、防災・安全教育を見直し、知識だけでなく、様々な状況下で危険を予測する力や判断力、そして決断して実行する能力へと実践力を高めることである。